
千冬と束は似た者同士

彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

千冬と束は似た者同士

【Zコード】

Z0576Z

【作者名】

彩

【あらすじ】

千冬と束がひたすら仲良しな話。そして千冬の性格が全く別人な話。とりあえず、親友仲は恋仲にシフト?姉弟、姉妹仲は良好です。そして束はやっぱり天災のままでした。

まえがき

まえがきですが、小説の方向性をまんま書いてます。苦手な方は回れ右推奨です。

この小説は、主に千冬で構成されております。次点で束。

とりあえず作者が千冬と束の百合を書きたかっただけ。ひたすら仲良くじやれあう一人を書いてみたかった。

ちなみに、千冬のほうの性格捏造が酷い。いろいろ違う方向に向いていますが、それでもいい方のみ、楽しんで行って下されば。

……あと、作者は戦闘シーンが苦手。ISの機体についても、原作見ながらどうにかこにかでするので、機体の性能とかアドバイスもらえたうれしいです。

批判中傷は、お控えください。お手柔らかに、気長にお付き合い下さると幸いです。

似た者同士たちの出会い

「ああ、嫌ね。面倒だわ」

よる、めをあましたら、おかあさんの「えがき」でした。

「今更、そんなこと言つても仕方ないだら」

コレングでおかあさんと、おとうさんがはなしてた。

「でも私、言つたわ。結婚するとき」

なにをはなしていのかな?わたしはドキドキして、わくわくからおかあさんとおとうさんのはなしを、きいてみた。

「私、子どもは絶対にこらなって、言つたわ

わたしは、いらな」「どもなんだつて。

とある幼稚園の、入園式。一クラス三十人あまりで、計三クラス。クラス名はあさがお、たんぽぽ、ひまわりと幼稚園らしい可愛らしいもの。

全体を通しての入園式が終わり、クラスごとの部屋に来て数十秒。イスに座つたままはしゃぐ子、緊張したように周りをキョロキョロと見ている子、立つて歩き回る子として早くも注意されていの子。

少しだけ見慣れてきた毎年毎年の光景と、子どもたちの騒ぎ声に、部屋に入ってきた今年で一年目の若い女の先生が、笑顔で口を開いた。

「はい、みんなー！こんにちわー」

「こんにちわー！ー！」

元気に挨拶をすれば、殆どの子どもが元気よく、中には恥ずかしそうに小さな声で、返事をしてくれる。彼女はそれに笑みを深めて、大きな身振りで自分を示して子どもたちを見渡した。

「今日からみんなの先生をする、佐々木加奈です。加奈先生って、みんな呼んでねー」

「かなせんせー！」

「はーい！」

上々の反応に、加奈はうんうんと頷く。出だしは好調に見えた。にこやかに笑顔を浮かべたまま、加奈は子どもたちを見回す。笑顔の子、おどおどした子、隣の子に話しかける子、たくさんいた。

「（…………あれ？）」

その中に、加奈は予想しない存在を見つけて、少しばかり驚いて目を瞠る。

見つけたのは、どういうわけかパソコンを持ち込んでいる女の子。周りを一切気にせずにカタカタとキーボードを打ち鳴らす姿は、子どもとは思えないほどに異様に映る。

加奈が特に気になつたのはこの子ども。けれどその疑問も、次々に消化しなければ無い恒例行事の為にすぐに思考の外へと追いやられた。

「それじゃ、まずは自己紹介をしましょ。お友達に、自分の名前を元気よく教えてあげてくださいね」

一番は、相田君。そう彼女の言葉で順調に始められた自己紹介に、またも彼女が少しばかり目を見開いたのは、あ行が終わる直前の事。

「織斑千冬です」

席を立ち、名乗り、また座る。僅か三秒の出来事に、加奈は何も言えずにあんぐりと口を開けた。

どの子どもも、もじもじと照れたり、元気よく名乗つたりと子どもらしさが見えるのに、たった今名乗つた女の子にはそれが無い。ただの事務作業のよう、それを終わらせてしまった。

「……あ、そ、それじゃ次は、川内藍ちゃん」
「ひや、ひやー！」

思わず呆けてしまつた彼女は、慌てて次の女の子を促した。今は順調に自己紹介を終わらせることが第一とされ、一人だけを気に掛けるわけにはいかないのだ。

そのまま、彼女の思うところの子どもらしい自己紹介が続き、さ行に差し掛かつたところで、順番は、彼女が気にしたパソコンを持ち込んだ女の子の番となつた。

「それじゃ、お名前を言つてくれるかな？」

「……」
「あ、あれ……？」

促しても、女の子は彼女を見ようとしない。ただ無表情に、

切の顔を遮断しているかのようにパソコンを打ち鳴らしていく。

「えっと、お名前、言つてくれるかな？」

再度、困惑しながら聞いて、初めて女の子がパソコンから一瞬、視線を加奈へと向けた。その視線はまたすぐにパソコンに戻されたが、ほそりと小さな咳きが一つ。

「…………篠ノ之束」

これで良い?とばかりに響いた名前に、加奈は思わず頷いてしまつて、自己紹介は次へと進む。

「(え、どう事かしら……?)」

子どもたちの自己紹介を聞きながら、加奈は困惑に頭を悩ませた。自己紹介前半にして、既に問題児候補が一人。それも、やんちゃで困るといつのとはまた別の意味で困りそうな、そんな問題児候補。これから彼女は、そんな問題児たちがいるクラスを受け持たなければならぬ。

「(…………がんばれ、私!)」

心中で激励して、じつをりと握つた握りこぶしは、じつと汗ばんでいた。

入園式のみで終わったその日の翌日。
大きな部屋ではあちこちで遊ぶ子どもたち。鬼ごっこいやまわらわ、

積み木遊びとジャンルは幅広い。

先生である加奈が声をかけるのもあって、人見知りで混ざりたくても混ざれないでいる子どもは、すぐに何かしらのグループに入れられる。そのおかげで、一人で遊んでいる子どもは残すところ一人だけだ。

「千冬ちゃん、皆と遊ばないの？」
「いいです」

千冬は、二人のうちの一人だった。誰とも遊ぼうとせず、ただ眺めているだけ。加奈が声をかけても、淡々と素つ気ない返事をするだけだ。

「（厳しいわね……）」

実は彼女、千冬に声をかける前にもう一人、パソコンを持ち込んだ女の子にも声をかけている。が、女の子には返事をえしてもらえず、その存在を認識すらされずに終わってしまったのだ。

「あつ……」

困惑する加奈を前に、千冬はてくてくとその場を離れる。放つてはおけないが、扱いに困つてしまつて、触れるに触れられない。

「かなせんせー！」
「あ、はいはーい」

他の子どもに呼ばれて、加奈はそちらへ向かう事にした。

一方、加奈から離れた千冬は、折り紙や絵を描く為に用意された机のある一角に座つていた。

椅子に座つて、他の絵を描く子どもたちからは十分すぎるくらいに距離を取つてゐる。そしてただぼんやりと、遊び回る子どもたちを眺めていた。

「（うるさい……）」

沸き起つるのは子どもらしからぬ感情のみで、千冬は椅子の背もたれの寄りかかる。

静かな場所で、一人になりたい。それが少女の望みだつた。けれどその望みとは裏腹に、少女の周りは騒がしさに溢れていた。すぐそばを走りまわる子どもたちの足音とはしゃぐ声に、少女は椅子を飛び降りてまた歩き出す。

「（……静かな場所は、どこだ？）」

一人でいると、先生が声をかけてきた。子どもたちの近くにいると、そこはいつそう騒がしかつた。

出来るなら一人でいたかつた。静かな場所にいたかつた。それが無理でも、せめてこの騒がしい空間で一番静かな場所は、と千冬は壁沿いに部屋を歩いて探し回る。

そうして辿り着いたのは、もといた部屋の角の対角線にあたる部屋の角。そこは他の子どもたちも距離を置き、たつた一人の子どもだけが占有する空間。部屋の騒がしさから僅かに離されたそこで、女の子がパソコンをカタカタと打ち鳴らす。

千冬は、この騒がしい部屋でようやく見つけた空間に、静かに静かに息を吐き出した。

「邪魔、する」

一応は、先住者である少女にそう声をかけて、千冬はすとんと座

つて壁に寄りかかった。それに驚いたように顔をあげたのは、先住者の少女だ。

少女はカタリとパソコンを打つ手を止めて、座り込んだ千冬を眺める。じっと見つめてくる眼差しに、千冬はただ無言で見返して、やがて面倒くさがりうな様子で田を閉じた。

「……………」、束さんの場所なんだけど」

「そりが」

「邪魔なんだけど」

「少しだけ、いさせてくれ」

「なんで」

「……………」は静かなんだ」

あつちは煩いと、千冬は思つたままに告げる。それから、少ししたらすぐに出て行くからとも言つて、体育座りで立てた膝に額を押し付けた。

小さく縮こまつたその姿は、邪魔だという少女の邪魔にならないようこじしているかのようだつた。

「……………ねえ」

「……………なんだ」

「名前、なんていうの?」

少女は千冬の名前を覚えていなかつた。けれどそれは千冬もまた同じで、千冬は少女の名前を知らなかつた。過去形なのは、つい先ほど、少女が自分で名乗つたからだ。束さんと。

「織斑、千冬」

「千冬……」

縮こまつた体から発せられた声はぐもつていた。少女は千冬の名前を繰り返して呟くと、今までの無表情が嘘のよつた笑みをパッと浮かべる。

「ちーちゃん」

「……なんだ、それは」

「束さんはちーちゃんと呼ぶことに決めたよ。いいでしょ？ いいよね！」

「…………好きにしや」

一転して騒がしい少女に、千冬は投げやりに肯定の言葉を返した。のそのそと近づいてくる音に顔をあげる。すぐ隣で少女が千冬を見ていた。

「ちーちゃん」

「…………」

「私はね、篠ノ之束だよ。束さんだよ」

「…………そうか」

「そうなんだよー」

意味も無く強く頷いて、束は千冬の隣でまたパソコンをカタカタと打ち鳴らし始めた。

一人のいる部屋の角は他の子どもから距離を置かれて、子どもたちの遊ぶ騒がしさからは少し遠い。

入園してから翌日に千冬が見つけたのは、パソコンのカタカタと鳴る音が響く、束という先住者のいる空間だった。

似た者同士たちの出会い（後書き）

転生者が千冬と束と同じ幼稚園で出会い、一次創作では、束はともかく、千冬がとても子どもらししいです。

それを見て、思ったこと。千冬が束みたいな性格だったら、どうなんだろうと。

そんな千冬の、変わった話。ぶつちやけこれが書きたかっただけとか、言えない。

問題児は問題児

翌日、空は晴れ渡る青空だった。

当然のように外で遊ぶことになつて、千冬は照りつける太陽から逃げる様に日陰に入つて座つていた。

遠目に砂場で遊ぶ子どもたちや、時折視界を走り去る鬼ごっこをする子どもたち。

千冬のいる日陰はそんな彼らから遠く、先生の田の届くギリギリの範囲だったため、子どもたちの騒ぎ声は遠かつた。

「ちーちゃん、嬉しい？」

「……ああ

静かで嬉しいか、と聞いた束に頷いて、千冬はぼんやりと木の葉を眺める。当然のように束がいるけれど、気にはならなかつた。

「見て見て、ちーちゃん！」

軽く目を閉じた千冬に、束は身を寄せてパソコンを差し出す。横に細長いノートパソコンの画面に表示されている数式と何かの設計図に、千冬は首を傾げた。

「これは？」

「束さん特製の最新パソコンだよー。空中投影型ディスプレイ&キーボードでいつでもどこでも大画面で大容量だよー。すついーいんだよー。」

「へえ

「…………信じてない？」

「いや

軽い返事に不安そうに瞳を揺らした束に、千冬は首を振る。そしてじっとパソコンの画面を眺めて、もう一度首を傾げて答えた。

「理解は出来ないが、凄いのはその説明で分かつた」

「本当！？」

「ああ。束は頭が良いんだな」

「うんっ！！」

千冬のその肯定は、束にとつて初めての肯定だった。

子どもの身でありながら、大人ですら完成させることのできない理論を完成させる束を認める大人は、束の周りにいなかつた。両親ですら、束を腫物のように扱う。

同じ子どもでも、束の傍には誰も寄らない。無表情でただパソコンを打ち続ける少女は、幼い彼らにとつて理解できない不気味な存在だった。

「えへへっ、ちーちゃん！」

「……？」

そんな束に近づいてきたのは、千冬だった。

昨日一日、束は千冬と一緒にいた。千冬は何にも興味が無いようだつた。子どもたちが遊び回るのを、煩そうに見たりはしていたけれど。

それは、まるで束と同じように思えた。束は興味が無いものに一切の関心を抱かない。それは物だけではなく人間にも同様である。

ただ無関心に世界を見る束にとつて、千冬は初めて興味を抱けた人間だった。いや、もしかすれば既に、それだけでは無くなっているのかも知れないけれど。

「千冬ちゃん、束ちゃん」

「……」

「……」

抱き着いてくる束を、千冬が首を傾げながら受け止めてこねり、先生が声をかけてきた。

途端に表情を消す束。千冬もまたチラリと視線を向けて、けれどすぐに視線は先生を越えて空へと向く。ぽんやりと眺めた空は、雲一つ無い青空。

「みんなと遊ばないの？」

「いいです」

「……そんな」と言わないで、遊びましょ？」

「……いいです」

「あ、ちーちゃん待つてーー！」

何度も誘いをかける先生に、千冬は一言告げると立ち上がり、日陰から出て行く。それを追つて束もまた日陰を飛び出し、千冬の隣を並んで歩いた。

「ちーちゃんちーちゃん」

「……なんだ？」

「束さんを置いて行かないでほしーんだよ。泣こないよー。」

「……そうか」

「ああっ、待つて待つてーー！」

束がふざけて泣き真似をしてみせると、千冬はまったく気にした風も無く歩いて行つてしまつ。それを慌てて追いかける。

やうして辿り着いた次の日陰は、少しばかり隣まで近い場所だつた。

「ちーちゃん、ご機嫌斜め？」

「いや」

千冬は、煩くは感じても不機嫌になつてはいなかつた。昨日の騒がしさに比べれば、まだずっとましである。

一人はそのまま日陰の中で、束が千冬に寄りかかるようにしながら、座つていた。パソコンを打ち鳴らすカタカタという音が、千冬の耳を刺激する。その音を聞きながら、少女は目を閉じていた。

「…………」

自分の周りに溢れる子どもたちに、千冬は困り果てていた。切欠は偶然。日陰でぼんやりとしていた千冬たちの元に、ボールが転がってきたことだつた。

ボールで遊んでいたのは、二人から随分と離れた場所にいた子どもたちで、千冬は仕方なしにボールを持つて子どもたちに渡しに日陰を出た。投げ返すには遠すぎたからだ。

束は行かなくてもいいと言つたが、目の前にボールが転がつたままの子も千冬にとつては鬱陶しくて、それゆえの行動だつたのだが。問題は、その帰り道。先ほど撃沈した先生が、砂場を通りかかつた千冬を一緒に遊ぼうと誘つたことだつた。

子どもの一人が先生の真似をして、千冬を遊びに誘つた。そうしてそれが広がり、砂場の子どもたちから揃つて遊ぼうと誘われ、囲まれた。

「（…………煩い）」

せつかく騒ぎの外にいたのに、気づけばその中に連れてこられて、千冬は不機嫌だつた。表情には一切の変化を見せないが、その実、早くこの場から立ち去りたい気持ちでいっぱいだ。

「お城作るうー！」

「作るーー！」

そんな千冬の心情など知ったことじやない子どもたちは、えつさえつさと砂を盛り上げお城を作ろうと奮闘する。しかし、全員が全員、好きなように作るうとするものだから、出来上がるのはぐしゃぐしゃの砂の山。

できなーいとたくさんの中の声が上がつて、騒がしさが増す。それに耐えかねて、千冬は砂に手を伸ばした。

「みんなでいっしょに作ればいいよ。といしょは、おじろのかべを作ろう！」

「うんーー！」

「ほくもくべーーー！」

千冬の真似をして、子どもたちがお城づくりを再開する。といつて、千冬が指示を出して、皆で同じものを作り上げた。

結果として、小さいながら先ほどの砂の山とは泥雲の差のお城が出来上がつた。

「できたーーー！」

「ちふゆちゃん、すーーーー！」

「……」

尊敬のまなざしで千冬を見る子どもたちに、本人はといえばもう良いだらうかと考えていた。

遊んだのだから、もう良いだろ？か。もう離れても良いだろ？か。楽しそうな子どもたちを前に、千冬は小さな笑みを浮かべて見せると、緩慢な動きで立ち上がり歩き出した。

「あ？」

「ちふゅちゃん、どこに行くの？」

さながらハーメルンの笛吹が如く、歩き出した千冬の後ろをざらざらと着いて歩く子どもたち。砂場をいったん離れて、他の子どもたちの様子を見ていた先生は、それを見てあんぐりと口を開けてしまった。

昨日一日、東以外の子どもと話す姿を見なかつた少女が、子どもたちを引き連れている。それに驚いたのだ。

引き連れている本人は、全くの無表情で楽しそうには見えなかつたけれど。

「千冬ちゃん」

「せんせい、なんですか？」

「皆、千冬ちゃんともつと遊びたいんだって。一緒に遊びましょ？」

「……」

千冬が振り返ると、そこには田をキラキラさせた子どもたちがたくさんいて、加奈の言葉が嘘ではないと肯定しているようだつた。

「……つかれ、ました」

「え、もう……？」

言つた千冬が、疲れるほど遊んでいたようには見えなくて、加奈は思わず聞き返してしまつた。それに返つてきたのは無言の頷きで、うーんと頭を悩ませる。

子どもたちは、千冬の事情などまるで気にしてた風も無く、立ち止まつたその周りを囲んで遊ぼうと誘いをかけてきた。

（……煩い、な）

騒がしいのは嫌いだつた。千冬は加奈を見上げるが、彼女は困つたように笑うだけ。

助けは期待できない状況に、千冬は子どもたちを見て一つ提案をした。

「かくれんぼをしよう!」「かくれんぼ?」「やろーやろー!」

否は無く、その提案に全員が乗つてくれる。千冬は加奈を見て、小さく首を傾げて聞いた。

「せんせい、おにやつてくれませんか？」
「あ、私？ええ、いいわよー」
「じゃあ、ひやくがぞえて。みんな、かくれて
わーー！」

千冬が言うと、一斉に子どもたちは散り散りに走っていく。加奈はその無邪気な様子に笑みを浮かべて、それからふと、千冬がその場に立つたままなのに気づいて首を傾げた。

「千冬ちゃんも、早く隠れない」と

「私は、いいです」

え？

「私は、遊ばないです」

呆氣ことりれて固まってしまった加奈に、千冬はぐるりと背を向けて歩き出す。向かったのは束が座る日陰で、加奈が見送る先で少女はそこに座り込んだ。

「……困った、わねえ」

人気者になつたけれど、少女にその気は無いらしい。視界の中で、束が千冬に抱き着いていた。

「ちーちゃん、おかえりーー！」

「……ただいま？」

首を傾げて言った。束はギュウッと千冬を抱きしめて、体全体で喜びを表現するかのようにしながり笑っている。

「ちーちゃんがいなくて束さんは寂しかったんだよー」

「……束もくればよかつたんじやないか？」

「え、嫌だよ。束さんにはちーちゃんだけがいれば、それでいいの！」

「わづか……」

血漬けに言ひ束に、千冬はただ小さく返しただけで、視線は晴れ渡る空へと向けられた。首に回った腕に軽く手を添えて、軽く目を閉じる。ここには、束の声は聞こえるけれど、他の音は遠くて静かだ。

「束の傍が、一番落ち着くな」

「えつ、本当？本当ちーちゃんーー？」

「……静かで、いい」

「うれしいな、束さんもう一ちゃんの傍が一番いいよ……」

ギュウウと抱きしめられる腕に力が籠められる。少しばかり苦しくなつて、ポンポンと軽く腕を叩いて知りせると、慌てたように束が力を緩めた。

静かなこの空間で、千冬はのんびりと目を閉じて微睡んでいた。

問題児は問題児（後書き）

初投稿なので、一話連続で。あとはのんびり更新です。
ちなみにこの作品、束の千冬へのテレ度は常にMAXです。

正反対の少女たち

日曜日、千冬は自分の部屋でぼんやりとしていた。朝食は食べ終えた。両親はリビングにいたが、千冬は食べ終えてそつそつと部屋に戻つて来ていた。

「……」

静かで、自分一人の部屋が、千冬の好きな場所。誰の存在も、声も、視線も、何も気にしなくて良い場所。千冬はここが好きだった。千冬の両親は、そんな千冬に何も言わない。ある日、何の前触れも無く部屋に籠る事の増えた我が子に、何も言わない。千冬は、これが本来の姿だったのだと受け入れた。

「……」

置物のようにぽんやりと、ただそここにいる。それだけ。

「ちゃん！」

「ん？」

「ちーちゃん！ちーちゃんちーちゃんちーちゃん！……」

「……束？」

立ち上がり、からりと窓を開けて身を乗り出す様に外を見ると、束がいた。一階の窓から顔を出した千冬に、束が満面の笑みで大きく手を振り飛び跳ねる。

「おひはよー。ちーちゃん！」

「おはよう……何をしていいんだ?」

「遊びに来たんだよ!!」

「……ちよつと待つてろ」

トントと窓を開けるために乗つっていた机から下りて、パタパタと玄関へ向かつて扉を開ける。部屋を出る直前に見た目覚まし時計は、八時を指していた。

開けた扉に手をかけたまま、千冬は考える。一度、家中を見てから束に首を傾げた。

「うひ、入るか?」

「いいの!?」

「……たぶん、構わない。どうぞ」

「わーいわーい!」

大喜びの束を家に招き入れて、千冬は扉を閉める。一階への階段を上るうとしたところで、トイレから出てきた母親と目が合つたけれど、何の言葉も無かつた。

自分の部屋へと連れて行き、そうすると束はキラキラと目を輝かせて室内を見回し始める。

「ちーちゃんの部屋!」

「そうだな」

興奮する束に、千冬は何が面白いのかと首を傾げた。

千冬の部屋には、特に目新しい物は無い。何の変哲も無いベッドに机、本棚はあるが、あまり本は置いていない。プラスチックのタنسも普段から着るような服があるだけで、玩具と呼べるような物は何も無かつた。

「ちーちゃんの匂いがあるよ~」
「あまり嗅ぐな」

ボスッとベッドにダイブした束が枕に顔を埋めて言ったのと、ベッドに腰掛け返す。

遊べるような物も無い部屋で、一応はどう歓迎すべきかと千冬は頭を悩ませたが、答えは出なかつた。

「束」

「な~に?ちーちゃん」

「したいことはあるか?」

「したいこと?」

問われて、束ははてと首を傾げる。したいこと、したいことと感いて、パツと笑つた。

「特に無いね!」

「……なら、何をしに来たんだ?」

「ちーちゃんに会いに」

「……会いに?」

「うん」

最近は楽しみになつてきた幼稚園が、今日は休みだつたから。楽しみの理由である千冬に会えないとなつて、束はそれならと会いに来たんだといつ。

たつたそれだけ。ただそれだけ。自分に会いに来たという束に、千冬は心底不思議そうに聞いた。

「なぜ私に会いたがる?」

「束さんはちーちゃんにフォーリンラブ!」

「ふおー、りん……？」

「ちーちゃん愛してるーーー！」

「…………愛？」

ますます分からぬ、と田をパチパチと瞬かせた千冬に、束は笑う。

「ちーちゃんは、束さんと一緒にいればそれでいいんだよー

「一緒に、か？」

「わうだよ。それでいいんだよ

「…………わかった」

今度は単純な答えに、千冬はあっさりと頷いた。束の笑みが深まる。

腰かけていた体勢からベッドに倒れ込んだ千冬は、同じように横に寝転んだ束に、思つたままに伝えた。

「束の傍は落ち着くから、一緒にいい

「その返事は最高だよちーちゃん！」

ギュウシと抱きしめられる。柔らかなベッドの上で抱きしめられて、千冬はそのまま目を閉じた。

幼稚園の子どもたちの千冬と束への評価は、正反対なものだった。千冬は、子どもたちの人気者だ。見た目は目つきが鋭く恐い印象を与えるも、一度触れてしまつと、不思議なほどに子どもたちは千冬に懐く。それはもう、先生以上に子どもたちを統率してしまつべからーーー。

束は、子どもたちに距離を置かれている。話しかけても見向きもされず、それ以前に常に無表情でただパソコンを弄り続ける束が、子どもたちには異質で恐かつた。そう思うのは子どもだけでは無く、大人までもそうだった。誰もが束を扱いかねて、近寄ることが出来ない。

そんな正反対の評価を受ける千冬と束だが、当人たちはとても仲が良い。遊び始めると、子どもたちは拳つて千冬を誘おうとするが、千冬本人はその前に既に束の傍にいる。それによつて、子どもたちは千冬を誘うことが出来ずにやきもきする羽目になる。一人にとつて、それは全く関係の無い事らしいが。

「ちーちゃんどう? これすつごいでしょ!!」

「……よく分からないが、何をするためのものなんだ?」

「空を飛ぶんだよ! 着るだけで飛べるんだよ、びゅーんつて!!」

「それは、確かに凄いな」

束の見せる設計図は、相も変わらず千冬には理解できない数式や言葉でいっぱいだが、彼女は嫌な顔一つしない。束の単純明快な説明を聞き、言葉少なに思つたままの感想を言う。その繰り返し。千冬と束は、いつも一緒にいる。幼稚園に来ると束が千冬に突撃し、それから基本はずつと一緒にいる。時々、千冬が先生に引っ張られて、他の子どもたちの輪に入れられることがある。その際に束は絶対に一緒に行きはしない。無表情に不機嫌なオーラを出しはするが、けれど千冬は、子どもたちの遊びに一度付き合つと、もう良いだらうとばかりに束の元に戻つていく。そうなると誰かが引き留めようとも、全くの興味を示さなくなる。そうして千冬はまた、束の話を聞きながら時間を過ごすのだ。

「ちーちゃんは、笑わないね」

「……なんだ、突然」

話しの最中、束は何を思ったのか咳くよつと言つた。千冬が首を傾げて見ると、彼女は拗ねたように唇を尖らせて返す。

「あの子たちには、ちーちゃん笑うのに。束さんにはちーちゃん笑つてくれないんだよ」

子どもたちと遊んで、遊び終わると千冬は決まって小さな笑みを浮かべる。そうしてから、束の元に戻る。

けれど束にそうした笑みを千冬が向けた事は無くて、束はそれが不満で仕方が無かつた。

むうつと説明した束に、千冬はパチクリと手を瞬かせて聞く。

「…………笑つてほしいのか？」

「笑つてくれるの？」

「別に、それくらくなら」

笑えといふなら、笑えると。千冬は、束の願いに答える様に小さな笑みを浮かべて見せた。

じつと見つめてくる束の目を、笑みを浮かべたままで見返す。喜ぶかに思われた束は、とても不思議そうな表情をした。

「ちーちゃん、無理してる？」

「…………どうしてだ？」

「だって、楽しそうじゃなこよ。面白やうじやないよ。笑つてるけど、泣きやうだよ」

「…………」

矢継ぎ早に言われた言葉に、千冬はふつと笑みを消して束を見る。そうすると、束は何処か安心したように千冬と入れ替わりで笑みを

浮かべた。

「ちーちゃんは、そっちの方が楽なんだね」

「……そう見えるのか?」

「見えるよ。束さんにはなんでもお見通しなのぞー。」

「……そうか?」

「あれ、なんでそこで首傾げちーのへーじーは、凄いねって言いつとこるだよー!?」

「……」

「ちーちゃん、黙っちゃ嫌だよー。何か言つてーー。」

「……束は、凄いな」

呟くより言われたそれは、普段とはどこか違う響きを持つていた。

「べつに、楽しくて笑うわけじゃない。ただ、笑った方が楽に離れられるから、笑うだけだ」

「ふうん……束さんは、あの子たちと遊ぶことがよく分からぬいけどねー」

「私も、興味は無い」

なのに連れて行かれてしまうから、困るのだ。千冬は一度として、自分から子どもたちの輪に入つて行つた事は無い。連れて行かれ、置かれ、穩便に輪を離れるためにその場を一度満足させてから、次が始まる前に離れる。

それは千冬が徹底して子どもたちとの間に壁を作つてゐる、何よりの証拠だった。

「わざわざ、関わる氣にもならん。騒がしいのは好きじゃない」

「束さんはちーちゃんに関わるの大歓迎!」

「……束の傍は、一番落ち着く」

「ねむつ、殺し文句だよー。束さんせせらなーちゃんの愛に溺れ
そうだよー」

「やうなのが?」

「やうなんだよー。」

全身全靈の肯定を前に、千冬はもう一度、やうなのがと呟いた。
よく分からぬままに納得したらしかった。
基本的に、千冬は束の言葉を否定しない。ところでも、束だけ
では無く誰の言葉も否定しない。

全てを受け入れる。まるで千冬の中には何も無いかのように、何
かの器のようにその言葉を受け入れて、受け止める。言葉にすれば
簡単だが、実際に出来るかとなるとそれは難しい事だった。

「束さんもちーちゃんの傍が一番だよー」

「やうか

「……むう、嬉しいとは言ひてくれないねちーちゃん

「嬉しい?」

束の言葉に、不思議そつに千冬は聞き返した。

「束さんちーちゃんに、落ち着くつて言わると嬉しいんだよ」

「……?」

「あ、嬉しいじゃなくて愛してるでも良いんだよーむじゅわらの
方が嬉しいんだよー。」

「……愛してる?」

「ぐはつ」

それは、束の想像を絶する破壊力を持っていた。

歓喜のあまりに血を吐き出していくと倒れた束の体が、ぴくぴ

くと痙攣する。その顔に至高の笑みが浮かんでいるのを確認して、千冬はあまり気にした風も無く床を眺めた。

「（…………煩いのは、嫌いだけれど）」

唇を指でなぞる。笑おうと思えば、すぐに唇が曲線を描いた。そこには千冬の感情など、関係が無い。

ただ事務的に、必要だから千冬は笑える。笑みを浮かべて見せる事が出来る。そつするのが楽かと言われれば、全く樂じやないと言えたけれど。

「束」

「んんっ？なにかなちーちゃん。束さんはちーちゃんの愛に溺れて溺死寸前救援求だよ」

「私は好きじやない相手の傍に、いたりしない」

「…………」

「笑つてなくとも、たぶん私は、束の傍にいるのが　　楽しいと　　思う」

「大好き、ちーちゃん！――」

千冬の告白は、いつものように無表情だ。それでも束を喜ばせることは十分すぎた。

笑いかけはしなくとも、千冬も束も互いを想ひ気持ちは、同じだつた。

正反対の少女たち（後書き）

課題、いかに千冬と束を融合できるか。

興味が無いものに興味を示さないのって、普通でしょ？

「～～～」

カタカタとパソコンを打ち鳴らす。三つの画面に三つのキーボードが、今私の目の前にある。

次々と画面に表示させていく数式も、図形も、全部分かる。だって考えのたのは私だから。

「～～～～～」

見かける人間は皆同じ人間に見える。違ひなんて無い、皆同じ。唯一、ギリギリでうちの両親を身内だつて判断できるくらい。

誰だつて、ただ街ですれ違つただけの人間を覚えていたりしない。

私にとつてはそれが、興味の無い人間や物だつただけ。

考えようと思えば何でも考えられた。一から十まで完璧に、とてもあつさりと理解して考えられた。

「～～～～～～～～～」

私の興味を惹くものは何も無かつた。両親が私を気味悪く見ていたのも知つてゐけれど、まったくもつてどうでも良かつた。興味が無いから。

考えたものをパソコンに打ち込むのだけ、ただ考えを外に出すだけで楽しくない。だって私の頭の中に既にあるものなんだから。でも、最近はそれが凄く楽しくなつてしている。

「~~~~~」

「これを見せて、きっと分からないんだろうな。
それでもいいんだけどね。

分からなければ分かるように私が説明してあげる。それだけの事
なんだよ。

ちーちゃん、私が初めて興味を持った女の子。ちーちゃんの傍は
いつも落ち着いて、心地よくて、離れる事なんて考えられない。
なのにちーちゃんつてば人気者なんだから、他のに連れて行かれ
て束さんはいつもジョラシー。
でもすぐに戻つて来てくれるちーちゃん。そのちーちゃんの愛で
束さんは常に溺死寸前だよ。

「~~~~~」でーきたー

ちーちゃんはこれを見て、なんて言つのかな。束さん的には愛
してゐて言つてほしいな。言つてくれないかな。

「待つててね、ちーちゃん」

うぶつこ束さんは、今日もちーちゃんまつじぐひー。

時が少し経ち、千冬と束は小学生となつた。

一学年二クラスと、少子化の昨今にしては大きい方といえるかもし
れない。

「見て見てちーちゃん!」

いつものように、束は席に座っていた千冬の前にパソコンを差し出した。そこにはまた、千冬には分からぬ数式や図形が表示されている。

「いろんな物を量子変換…？」でもいつでもなんでも取り出し可能！これで鞄要らずだね…！」

「へえ。それは便利だな」

「でしょでしょ？ つてなわけでさつそく作つてみるんだよ…」

「駄目だ」

「わざわざわくわくとする束を、千冬は首を振つて止めにかかった。

「えー、なんでなんでなんでー？」

「束の考える物は凄いからな。誰かに見つかつたら、きっと煩くなる」

「ちーちゃんは煩くなるのが嫌いだねー」

「……でも、そんなに作りたいなら、作ればいい」

「つづりん、作らないよ。ちーちゃんが嫌ならやらなーい」

おおよそ、小学生になつたばかりとは思えない会話をする一人は、クラスでも浮いていた。幼稚園の頃から何も変わらない光景だ。ちなみに、束がなぜ千冬と同じクラスにいるのかと言えば、簡単な話で同じ小学校だつたからである。偶然にも二人の住所から見ると通う小学校は同じで、クラスについても束が何かする前から同じクラスに振り分けられていた。

そして、偶然はさらに続き席は一人とも隣同士だ。千冬の席が廊下側の一番後ろで、束は一列目の一番後ろ。さとしで始まる苗字が随分と多いクラスだつたようだ。

「はーー。ねはよひじやこまーす」

「おはよひじやこまーす」

千冬と束が、こつものよつて話してこるひちに、彼女らの担任となる教師が教卓の前に立っていた。

そうして、一人の小学校生活の幕が開いた。

学校からの帰り道、束は千冬に言った。

「ちーちゃん、うち来ない？」

「束の家？」

「そつそつ。ちーちゃんに見せたいものがあるんだよー」

見せたいもの、と言われて千冬は僅かに首を傾げる。思いつくようなものは無かつた。

一瞬、今日の今後の予定を考えてみる。家に帰るだけだったから、頷いた。

「えつへへへ、ちーちゃんがうちに来るのは初めてだね！」

「ああ……そういえば、そうだな」

幼稚園の頃から、休みの日は束が千冬の家を訪れたので、千冬は束の家に行つたことが無かつた。束も、こんな風に誘つたことが無かつた。

ここにこと満面の笑みで千冬の手を握つて、束は家へと帰る。こんな風に笑顔で家に帰つたのはおそらく初めての事だった。

「ああ、ちーちゃん。どんどん入るとこによ

「お邪魔します」

奥へ奥へと進める束を前に、千冬は常識を捨ててはいなかつた。儀礼的に玄関で挨拶をしてから、靴を脱いで中へと上がる。

束の家は神社のすぐ傍にあつた。千冬は前に一度、束の家が神社で、他にも剣道の道場を開いていると聞いていたが、神社と道場とはまた別の場所に、家があるらしい。

一戸建ての家はどこにでもありそうな、普通の家だ。小さな庭もある。それは千冬の家と大差なかつた。

「いじつちだよー」

「……？」

束は千冬を庭へと連れて行つた。靴を脱いでいたので、置かれたままのサンダルを押借する。

庭に下りた先で、束はトントンと地面を二度、つま先で蹴つていた。そうするとどうという仕組みか、土に丸い円が描かれ、それを二つに分ける様に縦に切り込みが入り、半円になつた土がウイーンと左右に開かれていつた。

ぽつかりと、庭に出現したのは人間の子ども一人が通れるサイズの縦穴で、その内側は鉄板で覆われ梯子が設置されていた。

「さあさあ、入つて入つて」

「束、これは？」

「見てからのお楽しみだよーすつーいんだからー」

千冬は、束に促されるままに梯子を使って穴を下りていく。穴は五メートルほどの深さで、下りた先には広い部屋があつた。

「じゃじゃーん！なんとなんと、束さんは秘密基地を作っちゃい

ましたーーー！」

「秘密基地？」

「入れるのは、束さんとちーちゃんだけだよーそれ以外の人が入るうとしたら、電気がバシンッてなる仕組みだから。ま、それ以前に、入口を開けられないんだけどね」

「…………いつ作ったんだ？」

「二〇二〇くらい前かなー。束さんにかかればお茶の子そこそこ、朝飯どじいのが卵を割るより簡単にできちゃうのだよ」

「やうなのか……」

千冬は、きょろきょろと辺りを見回したり、壁となつている鉄板に手をはわしたりと、しばし部屋の中を観察して回っていた。その表情は少しばかり驚きが滲んでいて、それは束を大いに喜ばせる。

「ちーちゃん、楽しい？面白い？」

「…………まあ、少しほはな。束の考える物が凄いのは分かつていたが……実際にこいつのを見ると、驚くな」

「ふふつ、束さんが考えるのはこんなものじゃ無いよー。こんなのがただの部屋でしかないからね」

上機嫌に束は笑うと、鞄を適当に放り投げてパンッと手を打ち鳴らした。すると、何ヵ所かの部屋の床がくるりと回転し、裏返った床からテーブルやベッドといった家具が現れる。

さしそうめ、からくり屋敷というかのよう光景を田の辺たりにして、千冬は僅かに目を瞠つた。

「どつ？どつ？本当は量子変換で作らうかなって思つたんだけど、それはまた今度ね」

といつても、千冬に止められてこらつちは作りずて終わりそうだ

が。

束は千冬の手を引いて、現れたベッドにダイブする。鉄板の壁に覆われていはいるが、そこは一つの部屋だった。

「い」はね、束さんとちーちゃんだけの、秘密基地なんだよ」

「そのようだな」

「誰も見てないし、気づかないんだよ。い」こるのは、私とちーちゃんだけ」

「……束？」

妖しげな気配に、千冬は自分の首に腕を回したまま寝転ぶ束の方に顔を向けた。

刹那、唇に押し付けられた感触にパチパチと瞬きを繰り返して、次には唇を割つて入つてくるぬりとしたそれに目を見開いた。

「ん、ふつ……」

「んつ、ちーちゃん……」

気づけば千冬の体にのしかかる様に、束の体が上にあって。押し付けられた感触が束の唇だと、割つて入つてくるのがその舌だと、そう千冬が気づいたのはその息が絶え絶えになつたことだった。

「つん、ふあ……はつ、ふ……」

よつやく離された唇に、千冬は新鮮な酸素を貪るよつて肩を上下させ、呼吸を繰り返す。

その千冬の様子を、束は彼女の上にのしかかつたままで見下ろしていた。じつと、見つめている。

「ふ、は……束……？」

「ちーちゃん……」

見つめてくる束を、千冬はどうしたんだと首を傾げて見上げた。その頬は微かに赤く染まっている。

「……嫌がらないの？」
「何を……今を、か？」
「そう。キス……嫌じゃ、無いの？」
「……どう、なんだろうな」

嫌悪を感じたかといえば、感じず。それ以前に、今の行為に何かを感じたのかといえば、何も感じず。

ただ、幼いながらに千冬も今の束の行為の意味するところは分からぬわけで、彼女が真に求める答えが何かも分かつてはいた。

「……私には、分からないよ。束」

その結果として、千冬の出せる答えはそれだつた。告げられた答えに束は一切の感情を見せず、千冬を見つめる視線を逸らさない。そのままの体勢で口を開いた。

「束さんは、ちーちゃんが好きだよ」
「みたいだな」
「束さんが興味を持つたのは、ちーちゃんだけだよ」
「興味……私以外には、興味が無いのか？」
「無いね」

束はあつさりと、千冬以外の他を切り捨てる。それが当然のようには、事実彼女にとつてはそれが当然で。

その答えを受けて、千冬は考える様に視線を辺りに彷徨わせて、

そうして束を見た。

「なんで私に興味を持つたんだ?」

「さあ、なんでだらう。何となく……運命?」

「運命か……そういうのも、あるんだな」

気づけばただ、狂おしげほどに求めていた束にとつて、なぜ千冬に興味を持ったのかは、ある意味では興味を惹かれたがそれほど重要では無く。

重要なのは、今日の前に千冬がいる事で。そして千冬が、こつして会話しながら、自分を一切否定してこない事だった。

「……ちーちゃんは、不思議だね」

「……束は、なんでもお見通しなのでは無かったか?」

「そうだよ。そうなのこ、ちーちゃんは不思議なんだよ。束さんは、ちーちゃんが分からなくて不思議なんだよ」

「……それは、そうだらうな」

「…?」

千冬は、何も難しこことなど無こよつこ呟こて、言つた。

「私は私の事をお前にそれほど、話していないだろ?」

「……そう、だね」

「知らないのなら、分からなくて当然なんだ。そんなに不思議に思う事でもないだらう?」

「……じゃあ、教えてよ。ちーちゃんの事」

「いいぞ」

別に隠すことは何も無いのだと、千冬は軽く頷いた。

さつそく話そつ口を開いて、けれどそれからふ、と口を閉じて、

束に聞く。

「何から聞きたいんだ?」

「なんでもいいよ。ちーちゃんの事、たくさん知りたい」

「……と、言われてもな」

こぞ話そうとすると、何から話せばいいのか分からなくなつてしまい、千冬は少々困惑氣味に眉尻を下げた。

「じゃあ、束さんが質問してもいい?」

「ん、ああ。良いぞ」

その方が助かると、千冬は束の提案に賛成して、束の質問を待つた。束の質問は早かつた。

「ちーちゃんの好きなものは?」

「静かなところだな。自分の部屋は、静かだし一人になれて好きだ」

「嫌いなものは?」

「煩いことは嫌いだな」

「一人が好きなの?」

「ああ」

「束さんと一緒にいるのは?」

「束の傍は落ち着くから好きだぞ?」

それは、前にも言つただる、と。千冬の答えに、束はそれまでの表情を破顔させた。

無の表情から一転、いつものように笑つた束に、千冬は何となく落ち着く気分を味わいながら、そのまま投げかけられた質問に答えて行つた。

「家では何をしてるの?..」

「部屋にいるな。寝てることが多いか」

「なんで?..」

「なんで、と言われてもな.....それが、落ち着くからだ」

「ちーちゃんの親は?..」

「親?..」

束の口から飛び出したのは、彼女からは予想もつかない言葉で、千冬は思わず鸚鵡返しにそれを聞き返していた。

「束さんの親は束さんを嫌がってるナビ、ちーちゃんの親は?..」

「.....やうだな」

それまですりすりと答えていた千冬の口が、止まった。

「.....」

「ちーちゃん?..」

『』惑つたよつに束が千冬に声をかける。ハッとしたよつに千冬が目を瞬かせて、それから笑みを浮かべて答えた。

「親にとつて、私はいらなこ子どもひっこぞ」

何度も聞いてくるから、間違いないと。そんな確信を持つて千冬は答えた。

浮かんだ笑みはとても綺麗に作られて、それがあまりにも綺麗だったから、束は無性に腹立たしかった。

「ちーちゃん、また無理してる」

「ああ、そうだな」

「否定しないね」

「嘘じやないからな」

千冬は、素直だった。束が見破ると、それを浮かべたままで肯定してみせぬべからにて。

「笑つちややだ」

「なんだ、前は笑えと書つたのに」

「無理して笑つてほしくないよ」

「マンガみたいな事を書つ」

さながら主人公のようだと、千冬はそう書いて笑みを消した。笑みが消えれば浮かぶのは無で、鋭い目つきがさらに鋭くなつたように思える。

けれど束はむしりその表情に満足して、こいつかのように入れ替わりで笑みを浮かべた。

「ちーちゃんが無理するのは、束さん嫌だよ」

「そうか」

「だから、こじでは無理、しなくていいからね」

「……束と私だけだからか?」

「そうだよ。束さんとちーちゃんだけの、秘密基地。誰にも見られない秘密の場所だよ」

「…………書つておぐが、お前と一緒にいて無理をしたつもつは無いぞ」

「知つてゐよ。束さんにはなんでもお見通しー。」

当たり前のよう束が書つた。

束は千冬のすぐ横に体を寝転がせて、まるで抱き枕のよひに千冬の体を抱きしめて、耳に唇を寄せて囁くよひに書つ。

「束さんは、ち一ちやん」念ねてうれしこよ」

「……そつか」

「束さんは、ち一ちやんが大好きだよ」

「……知つてゐる」

ギュウシと抱きしめられて、押し付けられた少しだけ柔らかな胸に、千冬は目を閉じた。

閉じられた目から一筋、涙が伝うのを束は黙つて見ているだけだつた。

束の秘密基地（後書き）

小学生、彼女たちは小学生、だからまだこころと早い……と思つていたのに、気づけばどうして束が暴走。どうしてこうなつた。つまりこれはこの小説における一人の方角をすでに示しているということ。つまりはやうこつことです。

彼女たちの日常

学校では授業を受けながら束の相手をし、放課後は束の家に招かれ彼女の部屋か、秘密基地で過ごす。

千冬の日常は、入学してから一週間でそんな風に固まっていた。もつとも、その間に早くもクラスメイトに懐かれたり、担任から眞面目で生徒たちの中心人物という評価を貰つたりしていたが。

「今日は何する？何するちーちゃん！」

「束のしたいことで良いが……ああ、そうだ

その日もまた、千冬は束の家に向かっていた。束が後ろ向きで歩きながら千冬に尋ねて、千冬は言つてから少し考え、ふと思いついた事を言つ。

「束の家の……篠ノ之神社、だったか？見てみたい

「神社？ん、いいよいよ。それじゃいこつか！」

「ああ」

それじゃあ近道、と束はくるりと方向転換をすると、脇道に入つていく。束の家と神社は近いけれど別の場所にあって、この道の方が早く着けるのを束は知つていた。

既に近くまで来ていたのもあって、方向転換から十分ほど歩くと、たくさんの木に囲まれた大きな神社が見えてきた。ただし、通ってきた道は神社の裏側に通じていたらしく、まず目に入ったのは建物の後ろ側だったが。

正面へと回り込んで、千冬はまじまじと神社を見上げる。参拝客

の姿も無く、風に揺れる木々の葉の音が静かに響いた。

「これが篠ノ之神社だよ」

「結構大きいんだな。お参りしてこくべきか……」

「ちーちゃんがそんなことする必要無いよー。」

「……神社の娘が何を言つ」

「だつて興味無いもん」

あつけらかんと言い放つ束に、千冬はまあいかと思い、気まぐれに辺りを見回してみる。広い境内は見通しが良くて、神社の傍に立つまた別の大きな木造の建物に、千冬は首を傾げて指差した。

「あれは？」

「剣道の道場だよ。見る？」

「いいのか？」

「いいんじゃないかな」

それじゃあ、と千冬は束に導かれるままに道場の扉を少しだけ開けて、中を覗いてみる。

中では、千冬と同じくらいかそれ以上の子どもたちが、師範であろう男性の掛け声に合わせて竹刀を振るつていた。

男性と子どもたちの掛け声が、千冬の耳を大きく揺さぶる。それに溜息を吐いて、千冬は扉を閉めた。

「ちーちゃん？」

「……中、凄いな」

「そう? 束さんはこの中を見た事無いからな~」

「見てみたらどうだ?」

「いいよ、興味無いもん」

「そうか」

いつもと同じ束の答えに、千冬もいつものように返して。一人がそろそろ行こうかと歩き出やつとしたところで、道場の扉が大きく開かれた。

「……束、何をしている?」

「何もしてないよ。束さんはちーちゃんとお散歩してただけ」

「君は、束の……友人か?」

「はい。織斑千冬です、束ひやんと仲良くなれています」

「……」

淡々とした挨拶をする千冬に、扉を開けた男性 束の父親、柳韻はじことなく苦虫を潰したような顔をした。

「……先ほど、中を覗いているようだったが、剣道に興味があるのか」

「いえ。何をしているのかと思ったので、覗かせてもらつただけです。」迷惑をおかけしました

軽く頭を下げる、千冬はそれっきり、興味を無くしたように道場に背を向けて歩き出す。束がそれを追いかけてその手を掴み、そのまま歩き出したのを、柳韻はじっと見つめていた。

それから数日が経つた頃、千冬と束は秘密基地にいた。

秘密基地は最初に比べて見違えるほどに物が増え、束の「ひびきラボ」に変わっていた。

床のあちこちに伸びる配線を避けながらベッドに辿り着いた千冬は、そこに腰かけて上機嫌でパソコンを弄る束を眺める。

束の使うパソコンは、ディスプレイもキーボードも全て空中に投影したもので、そのスペックは束曰く世界一だった。

「ね、ちーちゃん。今日は何をつくろうか！」

「束の作りたい物で良いんじゃないか？お前が作るの、どれも凄いし

「えつへへへ、ちーちゃんに褒められた～」

嬉しそうに笑う束は、話ながらもそのキーボードを打つ手を緩めていな

束は、前々から考えていた発明品を続々と作りだしていた。というのも、今まで全て千冬に止められていたが、お許しが出たのだ。束と千冬しか入れない、この秘密基地で。その中でなら作つても良いだらう、と。

言つておぐが、千冬は束が作るのを無理に止めていたわけでは無い。ただ、束が千冬の言葉に素直に頷いたが為に、作られていなかつただけだ。

束の発明は、世に出れば一躍注目されるものばかりだ。そうなると自然と束の周りに人が群がるのは必須。騒がしくなるのも必須。それを千冬が好まず、また千冬を第一に考える束がそれを望まなかつただけ。

見つからないと言い切れる保証があるこの空間でなら、騒がれる心配も無いからと。千冬が言い、束が頷いたから、この秘密基地は束の発明ラボと化している。

「何から作りうかな～。ちーちゃんセンサーにしようかなあ

「……待て、なんだそれは

「ん？ちーちゃんを探すセンサーだよーちなみに超小型GPSはもう開発済みだから、実はいつでもどこでもちーちゃんを発見出来るんだよー！」

「ちなみに、そのGIRLはどこにある?」「

「言つたらちーちゃん、取つちゃわない?」

「どうない」

「んー、と束は少しばかり歎んで見せたが、すぐにパツと笑つてこ
こ、と首筋を指差した。

言われた千冬はそこに指を這わせ、すると確かに薄つぺらい何か
が肌に張り付いているのを見つける。

「いつの間に……」

「ちーちゃんに抱き着いた時だよ。肌の色と同化するからまず見つ
けるのは不可能!」

「……」

千冬は無言で、這わせていた指に力を籠めると、パキリと押しつ
ぶした。

「ああつー?」

「とりはしないが、壊す」

「ガガーン……そんな、ちーちゃんへのプレゼントが……」

「プレゼントならもつと平和的なものにして。こんなのがけなくた

つて、私はお前の傍にいるだろ?」が

「そうだけど、でもでもー……」

「いいな?」

「……はい」

睨みと共に凄まれて、束はしょんぼりと頷ぐ。どうやらGIRLは
千冬の好みでは無かつたらしく そもそも、いつでもどこでも
相手に分かる状態で、喜ぶ子どもの方が少ないだろう。

「ん~、それじゃ、今日は量子変換装置にじょひー。」

「ああ、この前言ついていたやつか」

「やつだよ。いつでもどーでも鞆要りやつ~」

歌うように束は言つて、タタタッとキーボードを打ち鳴らす。それと並行して、束の座る椅子から伸びた機械の手が何かを組み立て始めて、千冬はそれを眺めていた。

千冬は束のように天才的な頭脳は無く、未だに彼女の作る物の仕組みは一切分からぬ。分かるのは、束が噛み砕きに噛み砕いて単純にした説明で聞いたことのみだ。

「ふんふふ~ん」

「……楽しそうだな」

「ん~、楽しいよ~。ちーちゃんがいるからね~」

「うしてまた、一つの発明が生まれて、彼女たちの一日は終わりに近づいていく。これが彼女たちの日常だった。」

そろそろ帰る時間だと、千冬が秘密基地から出た時。普段ならばまだ道場にいる柳韻が、道着姿のまま縁側から千冬と、続いて出てきた束を見下ろしていた。

「剣道を、やつてみないか」

「……はい?」

唐突なその提案に、千冬は彼女にしては珍しくぽかんとした顔で、何とも間の抜けた返事を返す。

柳韻は縁側から庭に下り立ち

何も履かずに裸足で

千冬に

竹刀を差し出した。

千冬は差し出された竹刀を間近に見つめ、首を傾げて不思議そうに柳韻を見上げて聞く。

「なぜ、私に？」

「……あまり、言つべき事では無いのかかもしれないが、君は私の娘と同じよに思えたからだ」

「束と、同じ？私がですか？」

「ちーちゃんと束さんが同じだと、なんか文句でもあるの？」

不機嫌を露わに千冬の隣に並んだ束が、柳韻を睨み付けた。柳韻が何とも言えない複雑な顔をして、一、二度首を横に振る。

「そうでは無い。だが、お前にも言つただろう。もつと物事に興味を持つてと」

「別に何にも興味が無い訳じゃないよ。すぐに飽きちゃうだけ」

「それがいけないと言つてているんだ。何にも興味を持たず、それを受け入れずに入っているなど、決して

「どうでもいいよ」

束が、ギュッと千冬に抱き着いた。

「ちーちゃんがいるもん。他はどうでもいい」

「束……」

「興味を持てないものにどうやって興味を持つて言つの？完璧に理解できるものにそれ以上どう理解を示せつて言つの？面白くないものを面白くないとと思う事の何がいけないの？」

「だからといって、全てを拒絶するのはいけない」

「別に拒絶なんてしてないよ。ただ興味が無いから気にしないだけ」

「……」

取りつゝ島も無いとせ、このことだらう。柳韻は娘の答へに頃垂れた。

束の中には既に束なりの考へが根付いており、それが間違つていると分かつていても柳韻には正すことが出来ずにはいる。正すことが出来ないから、柳韻は束に触れる事が出来ないままでいた。

「……剣道のお話、お受けします」

「ちーちゃん……？」

重苦しこともいえる沈黙の中、千冬はそれまでの会話などまるで無かつたかのよう、「答へを紡いだ。それに驚いたのは束だった。

「束と私が似てゐるかどうかは、お話しするつもりはありませんが……剣道については、お教えいただけるなら、教わりたいと思つています」

「……そうか」

「なんで? なんで、ちーちゃん?」

淡々と、紡がれる言葉に柳韻は顫き、束は疑問を投げかける。千冬はそんな束を見て、なんのこと無ごように答へを告げた。

「教えてくれると喜うのなら、教わるだけだ。他意は無い」

「そうなの? やつてみたかつたんじゃないの?」

「さあ……少なくとも、誘われなければやらなかつたと想ひ」

「せつかあ……じゃあじやあ、束さんが誘つたら、ちーちゃん束さんにつき合つてくれる?」

「私の出来る事ならな」

あつやつと叫びてのける千冬に、束は約束だよーと笑みを浮かべ

た。それに顔を返した千冬に、柳韻はやはり、と内心で苦い思いを抱いていた。

「（この子は、束と似ている……）」

誘われなければ、やらなかつた。けれど誘われたから、やる。束は誘われてもやろうとしないが、千冬は誘わればやるとこいつ。そこは決定的な違いがあつたけれど。

やると言ひながら、そこに一切の千冬の感情が無い。彼女は束同様に、他の事に興味を抱いていないのが分かつた。

「（ビビリ、ヒカル）」

笑顔で千冬に話しかける束と、それに無表情ながら答える千冬を見つめて、柳韻は竹刀を握る手に力を籠めた。

彼女たちの日常（後書き）

束にいつか//////をつかせるか、それが問題です。

束が秘密基地を作つたり、千冬が剣道を習つたり、束が発明をしまくつたり、千冬が人気者になつたりしながら、三年が経つた。束と千冬は九歳になり、七月になつて束に妹が産まれた。

「筹ちゃん」

「……デレデレだな、束」

「だつて可愛いんだよ！見てよほりー」「はいはい……」

両親への冷淡な態度がどこへ消えたのか、束はキャッキャとベビーベッドで寝転んで笑つてゐる妹、篠ノ之篠にだらしない笑みを浮かべている。

それを呆れたように溜息を吐いて見ながら、千冬もその横に並んでベッドの中を覗き見る。伸ばされた小さな手が、束の指を握つていた。

「赤ちゃんつて結構力持ちなんだね」

「そうなのか？」

「うん。だつて、ほり」

「うりー」

束は悪戯に手を上へと持ち上げて、そうすると自然と、束の指を握つていた筹の体が少しばかり持ち合がる。

なるほど、確かに力持ちだと、指にしがみ付いたままの筹に千冬は納得した。

「ちーちゃんも、もうすぐ産まれるんでしょう？」
「やつ話しているのを聞いたな。弟、らしい」

束同様、千冬にも姉弟ができる。もつとも、両親から直接言われたわけでは無く、日に日に膨らむ母親のお腹と、両親が話している内容から判断しただけなのだが。

「あ～、う～」

「……そろそろ、私は行くよ。剣道の時間だ」

「むう、最近はちーちゃんが束さんと一緒にいる時間が短くて、束さんは不満だよ」

「幕がいるだろ。終わったら寄るから、許せ」

傍らに置いてあつた竹刀の刺さつた鞆を持って、千冬は立ち上がる。最近の彼女は、師範と対等に渡り合つだけの力を持つていた。

それから、一ヶ月が経つた。千冬には、弟が産まれていた。

「一夏」

「……」

ベッドで眠る弟、一夏に千冬は少しばかり目を細める。

最近になつて家へと来た一夏を、千冬はよく眺めていた。可愛くて仕方が無い、とでも言おうか、束の気持ちがよく理解できた。

自分と同じ血を持つ、血を分けた家族というのは、千冬には一夏が初めてだったのかもしれない。家族と言つては、千冬と両親の間には壁があり過ぎた。

「……お前は、私が守るからな」

姉としての義務感か、それとも千冬の持つ感情ゆえか。
彼女は一夏の頬を撫でながら、誰にも見せたことの無い笑みを浮かべて呟いた。

気温も下がり、すっかり寒くなつた十一月。ぱらぱらと雪が降る
帰り道を、千冬と束は歩いていた。

「明日から冬休みだねー、ちーちゃん」
「そうだな。宿題、やらないとな」
「あんなの一時間あれば終わるよ。束さんに任せなさい。」
「……分からないとひむな」

束にかかれば、宿題などあつてないようなものなのだらつ。

「そつこいえば、篠ちゃんはどんな様子だ?」
「可愛いよ。既に束さんの心を掴んで離さない小悪魔さんだよー。」
「……小悪魔はともかく、元気みたいだな」
「いつくんはどうなのさ?見たいー。」
「一夏も元気だぞ。来るか?」
「行く!久々ちーちゃんのお家だね」
「確かにそうだな」

千冬が剣道を習つているのもあつて、束の家に行くことの方が多くなつっていた。一夏見たさに何度も来たことはあつたが、比率的には束の方方が圧倒的に多い。

「ただいま」

「待て」

ପାତ୍ରବିଧି

ぐ毛り、と束の首のあたりから嫌な音が鳴つた。といつのも、千冬がさつそく玄関を上がるうとした束の襟首を掴んだからである。

「挨拶くらいは、しろ」

「
う那蘭」
一

「よし」

パツと離された束が、そのままバタンと廊下に倒れ込んだ。

入ろうとすると、実力行使で止めに入っている。

ベッドが置いてある両親の寝室へと向かう。

「——便」

一夏は眠っていた。その寝顔に頬を緩めて、千冬はふ、と部屋を見回して首を傾げる。

「ちーちゃん？」

見たところ 大きく変わったことは無い
けれど感じる違和感
に、千冬は鞄をその場に置いて部屋を漁り始める。

「……」

千冬は険しい顔つきで、開けたタンスの中を睨み付けていた。首を抑えながらやつて来た束が、その様子に気づいて名前を呼ぶと、タンスを閉めて振り返る。

「どうかしたの？」
「服が無くなつていた」
「服？」

開けたタンスの中身は空っぽだつた。だがさすがに、これだけの情報では束にも事態を把握することは不可能で、首を傾げるばかりだ。

千冬は寝室を出てリビングを覗いた。こちらもまた大きな変化は見られなかつたが、細かな物が無くなつてているのに気付く。正体のわからない違和感の中で、千冬はテーブルに置いてある封筒を視界に収めた。

「……」

真っ白の封筒に入つていたのは、手紙だつた。

たつた一枚の手紙に目を通して、千冬は静かに目を閉じる。手紙を握る手に力が籠つて、ぐしゃりと皺が出来た。

「ちーちゃん、どうしたの？」

リビングに入つてきた束は、そんな千冬の様子に心配を露わに声をかけた。目を開けて振り返つた千冬が、手紙を握つた手をだらりと下げて束を見る。

こつものように無表情で、束の良く知る彼女の表情のままだつた。

「私と一夏は、捨てられたみたいだ」

「……なにそれ」

「ああ。常々、子どもは欲しくなかつたと言つていたし……要らなくなつたんじやないか?」

それは一夏が産まれてから更に増えた、両親の陰での言葉。いつなる日が来るのを、千冬はどこかで分かつていたのかもしれない。知らず知らずに覚悟を決めていたのか、手紙に書かれた両親の言葉を読んだ後も、然したる衝撃を受ける事は無かつた。

「……ちーちゃん」

「なんだ?」

「ちーちゃんが望むなら、ちーちゃんを捨てた人たちを見つける事は出来るよ?」

「……凄いな。そんなことが出来るのか」

「束さんに出来ない事は無いよ」

「ああ、そうみたいだな。でも、必要ない」

「……いいの?」

「いなくなつた人たちよつも、これからどうやって暮らすかのほうが大事だからな。親がいなことなると、まあはどうぐべきなんだろ?」

千冬の中であつたと、全てが処理される。消えた両親に一切の感情を抱かず、興味も無く ただ、必要となることを考えるその姿は、子どもと書つにまゝ、奇妙過ぎた。

「……ん?..どうかしたのか、束」

「……ちーちゃんは、泣かないんだね」

束はジッと、興味深そうに千冬を見つめている。見えないその奥を探る様な視線に、千冬は困ったように眉尻を下げた。

「……最近になって、思つんだが

「ん？」

「私はどうにも、あまり感情が動くタイプでは無いらしく、人や物を問わず、特に興味を抱くことも無い。喜びや悲しみといった感情に、左右されることも無い。千冬は手紙をひらひらと握りしめ、まあそんなことはどうでもいい、と呟いた。

「幸いにも、いくらかのお金は残してくれたらしくからな。すぐこの生活に困る」とは無むむつだ

「なら、どうするの？」

「さあな。両親の親戚など知らんし、このままの場合は何処か施設にでも入るんぢやないか？」

「ええ、それは駄目だよ……」

考えながら言つた千冬に、束は慌てて首を振つた。

「ちーちゃんが遠くに行くのは、絶対駄目……」

「そうは言つてもな……」

「んむ～～～あつ、そうだーちーちゃん、家に来ればいいんだよ！」

「はあ？」

何を言ひ出すのか、と千冬が目を丸くして驚いて見せると、束はえつへんとばかりに、小学生にしては大きくなり始めている胸を張つた。

「束さんがあちーちゃんといつくんの生活を保障してあげよ。田指せヒモ生活だよ、あーちゃん！」

「…………ヒモ生活が何かは知らんが、とりあえず却下だ。断る「ええつ、なんでなんでちーちゃん！－」

「一方的に世話になるのは嫌いだ」

とはいえ、実際問題、千冬は手に持ったままの手紙を封筒に仕舞いながら考える。

そうして、一刀両断されて嘆く束を見て、声をかけた。

「頼みたいことがあるんだが」

「なになにー？束さんなんでもするよーー！」

「…………両親の親戚、探せるか？」

「むづちゅうこー！」

束は大きく頷いて、空中にパソコンを起動させる。とりあえず、大人を探さなければ。千冬の出した結論はそれだった。

「…………あああん」

「ん？」

「うああああああん」

「ありや、いつくん泣いてるね

「のようだな」

封筒をテーブルに投げ捨てて、千冬は一夏が眠る寝室へと向かう。覗き込んだベッドで大泣きする一夏を抱き上げて、その体を揺らしてあやし始めた。

「一夏、泣くな。ほら」

「うああああん」

「大丈夫だ、大丈夫。お姉ちゃんが、守つてやるからな」

「う……」

泣き止んだ一夏に、千冬はくすりと小さく笑つた。

「お姉ちゃんは、ずっと一緒にいるからな」

抱いた温かな体を、離さないように抱きしめる。

その日、千冬の家族は一人になつた。

千冬の両親が蒸発したのっていつだろ？……思いつつ、一夏が誕生してすぐに消えてもらいました。

とにかく、この作品に転生者ってこるのだろ？

パターンとしては

- 1・まともな転生者（転生物の主人公のような、下心があまりない寧ろ原作にかかるのを最初は拒否するようなタイプ）
- 2・テンプレ転生者（下心満載ハーレム願望の強い馬鹿のタイプ）
- 3・1と2両方が出る
- 4・出でずに原作キャラで頑張る

どのタイプでも、千冬と束が百合で仲いいのに変わりは無し。

1のタイプなら、観察日記にでもなりそつかなあ。なんか俺の知ってる千冬と束と違うみたいな感じです。2はうやくなります。どのタイプも楽しそうですが、さてどうするか……悩みどころですね。

参考までに、皆様の考え方を聞かせていただけると幸いです。数字だけでも、もちろんコメント有りでも喜んで！……あくまで参考までですが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0576z/>

千冬と束は似た者同士

2011年12月7日22時49分発行